

## 空を切る

野元 正

切迫した刃筋の音が静寂を切り裂く。居合道場に剣士の気魄が満ちる。刃筋に心を込めなければ、空を切る音は鈍る。

最近多忙にかまけて鍛錬を怠っているが、居合を始めて三十年が経った。しかし心が波打つとき我が家の隣の神社で無双直伝英信流奥居合立業を試みる。

神殿に向い、両手を身体に沿って軽くたらし、自然体で立つ。相手の気配を感じつつ、前方につつと歩きながら、秘かに鯉口を切り、身体を開きながら右斜め前の相手を片手抜き打ちに斬りつける。

次の瞬間、右足を踏み込んで左斜前の相手を諸手上段から頭部めがけて斬り下げる。相手に心を残しながら刀を右に開いて血振りし、瞬時に納刀する。これはさり気なく行き交いざま相手を倒す技だ。「行連」という素敵な名がついている。相手は空。己の心に描いた仮想の敵だ。自分の心に宿る相手であるが、敬意を払う。命のやりとり以前の問題だ。

居合には「介錯」といって切腹する人に付き添って苦しまぬよう首を斬る技法が伝わっている。これは敵対でなく死への門出に對する敬意を凝縮した厳かな儀式の形なのだ。刃筋は相手に敬意を表して斬るとき以外は決して向けない。古来、刀を構える位置で介錯される者の貴賤が分かるといわれる。上段は貴、中段は普通、卑賤罪人は下段を指しているという。英信流は肘を肩の高さ、切っ先をやや下げて刀を肩に担ぐように構える。上段と中段の中庸といえよう。そして刀の重みで一氣に振り下ろす。カんでは刃筋が通らないから、切り口が乱れる。死者への礼を逸し、わが心の乱れに通じる。しかも首は斬り落としてはならない。皮一枚残し、死者への礼を尽くす。

空を切るうちに濁った心から澱が下りて

心がみるみるうちに清々しくなるから不思議だ。居合の極致は、修練により抜かずして相手に勝つ。それには、まず己の心に克つことが肝要だが、凡人の私には相手を制するどころか自己の心さえまなならない。心剣一如ならぬばらばらな心と身体を感じる。悟りの心が芽生えれば、さっきまでの苛立ちなど心の乱れは自然に収まっている。

もともと冷たい輝きを湛える日本刀に親しむために居合を始めた。無銘だが、家に父から伝わる刀があり、それを使って精神修養ができればと思ったからだ。無銘だから大して価値がある刀ではないと思う。しかし逆に無銘だから、本物であることは間違いない。銘のある有名な刀の写しかもしれないが、分らない。刀工が修行の一環として鍛え、作ったため銘を入れるに至らなかったものが、現在に伝わったのかもしれない。いずれにせよ、私は居合でこの刀に馴染んでいる。なまくらだが、この刀が側にあるだけで心が落ち着くのだ。居合で抜けば、心はたちまち空となつて雑念は吹き飛び、爽やかになることが多い。しかし正直に言うと、まだ修行が足りないせいか、ときどき、雑念を払えないこともある。

私が日本刀や居合に憧れたのは、日本刀の輝きに魅せられ、心をその刀に込めて、無駄のない凝縮された動きのなかで、私の魂を揺さぶり、たとえ一瞬でもすべての迷いを空にして、忘れさせてくれるからだろう。また、私の脆弱な心は、日本刀に込められた、死に向かい合う厳粛な輝きによって無意識のうちには鎧われているのかもしれない。錬のときのあの穏やかな心は、未だに熱しやすい私の心のためにこれからも大切にしていきたいと思う。